

古武道・香取神道流教士でもある岩田一政副総裁が、
武術研究者の甲野善紀氏と体を張って武術談義を行った。
まさに温故知新。古武術の身体操法の話から、
現代の日本人が失ってしまった大切なものが浮かび上がってきた。



日本銀行副総裁

岩田一政

Kazumasa Iwata

【いわた・かずまさ】1946年東京生まれ。1970年東京大学教養学部卒業後、経済企画庁（現内閣府）入庁、1985年経済企画庁経済研究所主任研究官、1986年東京大学教養学部助教授、1991年東京大学教養学部教授、2001年内閣府政策統括官兼務（経済政策一景気判断・政策分析担当）、2003年日本銀行副総裁就任。1980年から香取神道流入門、故・杉野嘉男先生に指導を受ける。1987年に教士の称号、1993年には巻物（免許状）を得る。

古武術の身体操法を突き詰めていくと 新時代の「学の体系」が見えてくる



武術研究者

甲野善紀

Yoshinori Kouno

【こうの・よしのり】1949年東京生まれ。武術研究者。1978年武術稽古研究会「松聲館（しょうせいがん）」を設立（研究会は2003年に発展的に解消）。武術の身体操法をもとに、各種武道をはじめバスケットボール、陸上競技、卓球、さらには楽器演奏、工学、教育、介護医療など多分野で指導の成果を挙げている。著書は、『身体から革命を起こす』（共著・田中聡、新潮社）『自分の頭と身体で考える』（共著・養老孟司）『「古（いにしえ）の武術」に学ぶ』『表の体育 裏の体育』（以上PHP研究所）『剣の精神誌』（新曜社）など多数。

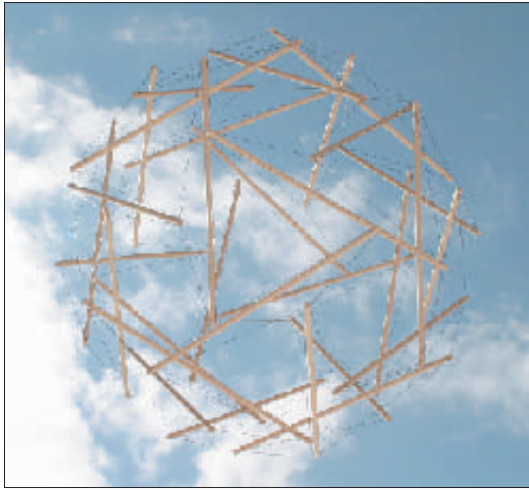
攻守を一体として捉え、
決して力まない——
速くて強く、
介護など応用範囲も広い

岩田 私は、学生時代に合気道とともに、鹿島神流の剣術を習いました。今は縁あって香取神道流に三十年来取り組んでいます。甲野先生のご高名は、本の上でしか存じ上げませんでしたが、『表の体育 裏の体育』（二〇〇四年PHP研究所）と出会って以来、ほとんどのご著書を拝読しております。

甲野先生は、古武術の中にある、今では忘れられてしまった体術というか、体使いを体現して、スポーツや介護の世界などに大きな影響を与えておられます。本日は、古武術の話を通じて、現代の日本人が忘れてしまった「何か」を見つめ直したいと思います。

ところで、古武術では力の伝え方自体が現代の常識に反しているように感じられるのですが……。

甲野 広く武道で重要とされる丹田の使い方を強調した場合、どうしても後進に伝わらない部分があります。そこで、現在、私は全身



テンセグリティ構造体 © 2006 シナジェティクス研究所
特許第 2524202 構造デザイン 梶川泰司

写真①テンセグリティは、構造上の形態が、不連続で局所的な圧縮材のふるまいによってではなく、有限で閉じた連続的な張力材の包括的なシステムのふるまいによって保証される構造原理を初めて具現化した。バックミンスター・フラー（『宇宙エコロジ』美術出版社 2004 から引用）

の力を個々の技にどう働かせるかを考えています。つまり、特定の部位に力感のないような形で動く方法です。その説明のためにバックミンスター・フラーが提唱した「テンセグリティ（張力統合体）」モデル（写真①参照）を使っています。これは武術的にみると、一部の負荷を瞬時に全体が引き受ける、完璧ともいえる相互互助システムになっておりまして、かのアインシュタインが、これを初めて見たときに、「これこそ宇宙の構造モデルだ」と感嘆したそうです。近年は、また細胞もこのテンセグリティ構造になっているのではな

いかという研究もあるようです。

岩田 張力統合体は、力の伝達と分散を説明するわけですか。

甲野 ちょっとお互いが、合気道という一教（という型）のような状態で組み合ってみましょう。（ここで実際に組み合う／写真②参照）

普通はこの形でお互いが相手を崩そうとすると、力がかみ合っていて動かなくなることが多いのですが、「抵抗する相手」を認めた上でそれを崩そうとはせずに、ただスッと腕も腰も脚も伸ばすというふうに身体各部がそれぞれ自分のやるべきことをやるようにすると全く違った展開が起こります。

岩田 なるほど。攻守の両者を一体のものと捉えた上で、力の伝播



写真②正座で相対した状態から互いに相手の手首と肘（ひじ）に手をかけて崩し合う。

に注目するわけですね。

甲野 また、ボクサーが相手からのパンチを払う場合を例にとりま

す。普通はバシッと払えばパンチは払えます。しかし、このように

ただスッと手を伸ばす動きに全身の動きが協調していると、払った

方が崩れていきます。この原理は、柔道のいなしや相撲で突っ張られ

たとき、あるいはラグビーでタックルされた場合にも有効です。人

間は、止まっているものと動くものの差位を見て動きに反応しよう

とします。だから、踏ん張って、蹴って、動くという形だと、どう

してもそれが目立つものですか

ら、その起こり、つまり攻撃してくるタイミングをとらえられてしま

います。ですから、体を働かせる構造そのものを根本から変えて

いくような動きを発見するように、発想を変える必要があります。

これは介護にも応用ができます。

岩田 介護への応用もNHKの講座で拝見しました。力を入れるのではなく、むしろリラックスして体全体を伸ばすということですね。

甲野 そうすることで介護する側が腰や背中を痛めない上に、受け

る側も気持ちよく委ねられます。

**無意識の力に
優るものなし**

甲野 私が創った介護の技に「浮き取り」というものがあります。

イスに座った人を、その座った姿勢のまま抱え上げるものです。感

覚的には井戸のつるべの両端の関係を自分と相手との間に築きま

す。普通なら太腿に手をかけると膝が股関節より上に上がってしま

いますが、この技では上がりません。その理由は、今のバイオメカニズムでは説明がつかないの

です。

岩田 全く無理な力が入っていませんね。

甲野 「足下薄氷を踏む如しという事」という教えが、『願立剣術物語』（注1）にあります。正に

これです。足を踏ん張ってはいけないのです。

去年の暮れに東大のロボット研究室に呼ばれて行きました。そこ

では指導教授の方も助手や院生の人たちも、私の体の動きに大変関心を持ったようでした。

しかし、体育関係の学者やスポーツトレーナーには、理論で説明

できないためか、どうも不人気です。この、理論的に解釈できないことを無視してしまう姿勢が、未知のものを解明しようという積極性に変わるというのですが。

岩田 高速移動という点では、鹿島神流では相心剣（注2）というのがあります。足を浮かせて「水鳥の足」のような感じですね。

甲野 本当に高速で動くには、あの微妙な力で全身を結ぶ構造が必要です。私は、よく糸電話にたとえますが、糸電話は糸が緩んでいたら聞こえません。ある微妙なテンションのある遊びのない状態の維持が必要です。それがあって、ある構造からある構造に変化するということが、現代の体育理論では説明不可能な古人の妙技を生んだのではないかと思います。

例えば道に飛び出したとき、車が来て「危ない」と地面を蹴って逃げようとすると、体が蹴る準備をしている間に車にはねられてしまいます。これが蹴るといふ筋肉動作の限界です。武術では準備する時間がありませんから、どんな場面でも瞬時に対応できなければなりません。

このとき、先程の『願立剣術物

語』の中にある教えの一つ「足は手に引かれていく」の原理で手で自分の体をリードして動かしてしまふのが速いです。

ところで、意識しないで結果として働いた力というのは、すごいものがあります。例えば高齢者が歩いていて耐衝撃性の分厚いガラスの壁に気がつかなくて、ぶち抜いてしまふ、というようなことが起こるのです。

岩田 割ろうと思っても簡単に割れないようなものを割ってしまうほど、衝撃が大きいわけですね。

甲野 意識してやったのではなく結果として起きた力……無想剣（注3）ではないですが、体全体が微妙に働いて結果として出てきた力は、予想外に大きなものがあります。

ただ、それを意識して解析しようとするとうとすると「それ」は姿を現しません。

岩田 矛盾というか、陥りがちな落とし穴ですね。

甲野 どうすればそういう力が自然に発揮できるのかというと、変に考えたらだめだということになります。

ところが、スポーツなどでは、

科学的に考えようとするので逆に限界をつくってしまう。考えるということは、要するに、二つの関係を整理することです。AのときにBですから、こちらを立てればこちらが立たずで……。

岩田 同時に反応できませんね。

甲野 ピアニストは左右別々の手で同時に弾けますし、車のレーサーなどは、両足はそれぞれブレーキやクラッチ、アクセルを操作し、片手でハンドルを、もう片方の手でレバー操作を行う。それをいちいち考えないで同時処理し、極力速度を落とさずにカーブを曲がろうとするわけです。意識すると他がおろそかになりますが、意識しなければ三つ以上のことができる好例です。

日本に期待される 全く新しい 独自の学の体系づくり

岩田 宇宙飛行士の野口聡一さんにも指導をされたと聞いています。

甲野 野口宇宙飛行士が所属していた宇宙航空研究開発機構（JAXA）の広報統括的的川泰宣先生に大変関心を持って頂きました。

お話ししているうちに、日本から独自の人間の動きに関する研究を発信できないかというようなところまで広がりました。これまでの科学の枠だと人間の動きを説明しにくい部分も多いのですが、武術の動きは現実にあることです。から、そういうことを包含した形で「学の体系」を世界に提示できれば、新しい学問の分野が切り開けるのではないかと考えています。

理論で物を説明するときには、「AのときにB」というように二つの事柄の関係しか取り扱えず、同時に幾つもの関係は説明できません。ところが、人間は三次元の世界で生きていて、二つの事柄の関係をとり扱う、いわば二次元の方法では説明し切れません。

剣術で無想剣というのは、「AのときにB」という意識下における二次元的状態とは異なり、遭遇した状況を全部、瞬間的に処理できる心身の状態をいうことだと思います。

このような、古伝の武術の術理も参考にして、現在の二次元的な思考体系を乗り越えた学問の体系が何とかできないかと考えている

（注2）相心剣 相手と同じ戦略を持って螺旋の動きで技を遣う鹿島神流の技。

（注3）無想剣 夢想剣とも書く。剣術諸流で若干解釈が違うが、無意識下で出る精妙な剣の技。



のです。

岩田 二次元というと、私の先生が最初に経済学を教えてくださいました。人間は二次元、ないしせいぜい二次元半しか考えられないとおっしゃっていました。だから、経済学でも多次元の変数を扱うときには数式の力を借りるわけです。今日のお話にもつながりますね。

甲野 我々の社会は、今さまざまなところで行き詰まっています。環境問題や近隣諸国との関係などの国際問題をはじめとする現在の諸問題は、今まで学んできたことをそのまま応用したのでは通用しなくなってきました。

武術における身体運用というモデルを通して、今の表現・記述方式の限界を自覚して、これまでとは違った学問体系を打ち建てること。これが、現代の抱えているさまざまな問題を根本的に解決する第一歩ではないかと思っています。

岩田 根本的な発想や思考体系、表現法から変えていかないと、現状の行き詰まりは打開できないというわけですね。

甲野 体を通して実現できる世界と、論理の世界との間に、余りにも大きな溝がありますが、その溝を埋めるような学問体系を発信するには、西洋化の限界点を既に感じていて、しかも東洋の身体文化も残っている日本が最も向いていると思います。

単に個々の環境問題に対しての対症療法ではなく、物事の捉え方や考え方の根本を革命的に変えるような学問体系を創ることは、今

後日本の若い人にとっては、最もやりがいのあることであり、しかも、全世界の人たちにとっても有益なことだと思っています

心技体は正に不可分

甲野 全く新しい学問体系を創るというと、大変革命的ですが、かつての日本の文化では、精神的なことと身体的なことは、全く分けていませんでした。

岩田 確かに分けていませんね。体の使い方の説明が、すなわち精神的な部分の説明だったりしています。

甲野 ことさら精神がどうだこうだと語り始めたのは、近代になってからのことで、それ以前の日本人の自然観では、体の使い方の問題は心の使い方の問題と非常に密接に関係していたのです。

昔の職人には、危険か大丈夫かを感じ取る身体感覚があったと思うのです。皇居の石垣も、大阪城の石垣も、関東大震災や阪神・淡路大震災に遭っても崩れませんでした。しかし、職人の感覚はあてにならないとする近代科学が、石だけで積んで崩れないという計算

ができないため石垣はコンクリートで固めないといけないことになってしまいました。そういう、人の感覚を信じないという近代思想が人心の荒廃を加速させたと思うのです。

今後は、感覚も取り込んだ新たな「人間の学」の体系を創らないと、さまざまな分野でますます行き詰まってくるのではないでしょうか。

岩田 先生のご活躍の成果は、介護とか、スポーツとか、いろいろなことに応用されています。私も先生のご著書を拝読して、母の介護の際に体の持ち上げ方などを、参考にさせて頂いています。とりわけ足の使い方。持ち上げるときに足を浮かせるなど、常識と違いますが全く体に無理がない使い方があります。

また、身体操法による感覚と理論の間にある大きな溝を埋めるような新たな「学の体系」づくりを提唱しておられることに共感しました。

本日は大変有益なお話を伺えたのみならず、実際に身体操法まで体験して大変勉強になりました。本当にありがとうございました。